

# 旭川市農業委員会委員候補者推薦及び応募の状況（最終公表）

## 応募（自薦）した者の事項

番号	応募者					農業経営の状況	認定農業者区分	応募理由
	氏名	職業	年齢	性別	経歴			
1	堀江 実	自営業	61	男	<p>&lt;農業委員, 農業関係団体での活動歴&gt;</p> <p>&lt;農業関係団体以外での活動歴&gt;</p> <p>H17年6月～現在 北海道環境保全推進委員</p> <p>H18年4月～H20年3月 環境モニター（環境省 北海道環境事務所）</p> <p>H18年11月～H20年10月 旭川市環境審議会委員</p> <p>H18年8月～H20年7月 旭川市景観審議会委員</p> <p>H18年10月～H20年9月 北海道美しい景観のくまづくり審議会委員</p> <p>H22年10月～H24年3月 上川中部定住自立圏共生ビジョン懇談会委員</p> <p>R6年4月～現在 旭川市空家等対策協議会委員</p> <p>H17年7月～H19年6月 北海道男女平等参画審議会委員</p> <p>H18年12月～H20年11月 北海道こどもの未来づくり審議会委員</p> <p>H16年10月～H18年3月 国有林モニター</p> <p>H18年4月～H19年3月 河川愛護モニター（国交省 北海道開発局）</p> <p>H20年4月～H21年3月 河川愛護モニター（国交省 北海道開発局）</p> <p>H24年4月～H25年3月 河川愛護モニター（国交省 北海道開発局）</p> <p>H19年1月～H28年6月 農業統計調査員（農水省 北海道農政事務所）※水稲調査, 面積調査, 農林業センサス他</p> <p>H22年4月～H28年3月 農業統計指導員</p> <p>H16年2月～H18年1月 旭川市消費生活会議委員</p> <p>H17年7月～H19年6月 北海道教育モニター</p> <p>H20年8月～H22年7月 旭川市中小企業等審議会委員</p> <p>H18年4月～H19年3月 国政モニター</p> <p>H18年4月～H20年3月 北海道総合計画モニター</p> <p>H26年6月～H28年5月 旭川市食育推進会議委員</p> <p>H19年1月30日 “石狩川水系石狩川（上流）河川整備計画（原案）に関する公聴会 一般公述「街づくりから見た本整備計画」”</p> <p>H22年2月 地域密着型農商工連携コーディネイター育成研修了（全国中小企業団体中央会）</p> <p>R</p> <p>主な調査報告（「都市学研究」北海道都市地域学会 研究論文集）</p> <p>H22. 第1調査報告 「旭川都心におけるビル稼働の経年変化」47号</p> <p>H23. 第2調査報告 「農から描くコンパクト」48号</p> <p>H24. 第3調査報告 「圏域運営のスマートスルー」49号</p> <p>H26. 第4調査報告 「民間主導による自立的・継続的・中性的地域活性化の手法と実践」</p> <p>—北の街づくりで推し進める私にとっての「小さな総力戦」— 51号</p>	<p>経営形態：—</p> <p>作付品目：—</p> <p>自作地：—</p> <p>借入地：—</p>	—	<p>市域が抱える4つの農業農村地域における縮退の傾向として、以下の見極めを行った。</p> <p>強い導線を領域内に抱えるか否かが、縮退の傾向を大きく左右する。具体において、東鷹栖地域は強い動線を有し、顕著な傾向をかるうじて回避している。一方江丹別嵐山は既に縮退へ突入し、その傾向を強め、東旭川町米原・瑞穂も同様と判断。神居町共栄・得分においても、概要の動線となる237号のポテンシャルは低く、時間の問題と受けとめた。</p> <p>次世代を多数抱える農業域（近隣町）においても、その線が細ければ萎えてしまう。原稿の農業域は旧来的な結びつきの態様を呈しておらず、その数的優位をもって、サスティナブルを判断する姿勢は、実態を反映しない。「若い世代に支えてもらう」という姿勢は極めて短絡的であり、将来を描けない地域においては、むしろ次世代は早々に見切りをつけ、郷土を離れるという予測が、「客観的な地域投射の通念」と思われる。</p> <p>現状と指摘機能の補完なくして、自活可能な農村域は県域に存在しない。都市域の減衰は、必然的に農村域の縮退を伴うものと思われ、両サイドにおけるファシリティマネジメント（公物管理）こそが、地域計画への精緻に投影されるべきものとする。</p> <p>原稿から、農水省が謳う本来的な意味での地域計画の本旨を酌量することができない。</p> <p>加えて実態活動において、変革の意欲が形骸化・硬直化して行くところ危惧する。</p>